

東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター  
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): 近代男性作家像の成立と前近代——その連続性と不連続性

研究課題(英文): The Images of Male Writers in the Modern Period and the Pre-modern Period:  
Its Continuity and Discontinuity

申請者名・所属先: 永井 久美子 (大学院総合文化研究科)

海外招聘者名: (なし)

## 1. 研究の目的

作家の伝記や肖像の研究は、従来、人物毎の個別研究として行われがちであった。作家像には類型があるのではないかという問題意識から、複数の例を横断的に見ることにより、多くの伝記および肖像に共通する傾向を分析することの必要性を感じ、本研究を申請した。作家という存在にいかなるイメージが求められているのか、作家はどのような自己表象を生み出す傾向があるのか。特に日本の近現代作家についてこの問題を考えることが、本研究の目的であった。

申請者は、2018 年から 2019 年にかけても、HMC にて公募研究 A の助成を受けている。前回の研究課題は「平安女流文学者たちの近代——「良妻賢母」と「美人」と文学」であり、女性作家の表象について論じた。新たに男性作家について考察を進めることが、今回の助成研究の目標であった。明治以後、作家の肖像写真は、新聞や雑誌を通して広く知られるところとなった。写真の普及やメディアの誕生が作家像の類型の生成にどのような影響を及ぼしたのかということも、本研究の課題の一つである。

## 2. 研究開始当初の背景

申請者は従来、平安期の作品を中心に、従来、絵巻物の研究に携わってきた。絵巻などで前近代に培われてきた人物のイメージが、明治以降における文学者像の確立にあたりいかに継承され、変容したかを追うことを、2017 年度から 2022 年度にかけて採択された科学研究費助成事業基盤研究(C)「前近代文学者たちの近代——明治・大正・昭和期における伝記と肖像の継承と変容」の研究課題としてきた。研究が時代別に分断されがちであるところ、近代以降の作家像と、江戸期までの伝記や肖像の連続性と不連続性のありようを分析対象とした点が、科研の課題の新たな着眼点であった。

研究を進める中で、近代における女性作家像の確立に、明治・大正期の美人観や貞操観が関わっていることについて考える必要性を見出し、前回の HMC 公募研究を申請した。絵巻でも描かれてきた小野小町が、近代以後いかにして「世界三大美人」に数えられるに至ったかを明らかにした研究成果は、HMC オープンセミナー等で発表し、HMC ブックレット第 6 号および国際日本文化研究センター大衆文化プロジェクトの論文集である『くキャラクター』の大衆文化——伝承・芸能・世界』(KADOKAWA、2021 年)にまとめている。

これらの成果を承け、男性作家像の類型についても、近代の身体観などとの関連性を考える必要があると考え申請したが、本研究である。先述の通り、伝記、肖像をめぐる横断的な研究は未開拓の領域であった。また、科研および前回の HMC 公募研究 A の課題が古典文学の作者たちを中心的に取り上げたものであったのに対し、近現代の作家の伝記・肖像へと研究の幅をさらに広げた点に、本研究課題の新しさがある。



### 3. 研究の方法

近現代の男性作家像を横断的に研究することを目標に据えつつ、研究の切り口として、助成期間中に開催する2回のHMCオープンセミナーで、それぞれ三島由紀夫と芥川龍之介の肖像写真の問題を取り上げることとした。この二人を特に取り上げたのは、2017年12月に申請者が韓国の仁川大学校に招かれたシンポジウム「『シン・ゴジラ』と日本の想像力」で討議を行った日本語日本文学科の南相旭氏と李碩氏がそれぞれ三島と芥川を専門としており、先方との研究交流を継続したいという希望からでもあったが、それ以上に、三島と芥川は、男性作家の肖像を考えるうえで、写真が多数知られた好例であるためである。

研究を進めるにあたり、具体的には、三島と芥川について、新聞のデータベースを活用し、報道でどのような写真が用いられたのかを調査するとともに、出版された作品にどのような写真が付されたかを調べた。三島については、三島自身が企画に関わった写真集も分析対象とした。

申請者の元来の専門分野は平安古典文学であることもあり、近代文学をめぐることは、オープンセミナーで南氏、李氏をディスカッサントとして招き、討議を行うことにより知見を広め、問題の所在を明確化していった。肖像の分析という点においては、従来、絵巻物の研究で申請者が用いてきた手法を応用している。

### 4. 研究成果

オープンセミナーは、コロナ禍の状況も鑑みてオンラインで実施し、南氏、李氏の招聘こそ控えたものの、両氏にはセミナーのディスカッサントを1回ずつ担当してもらい、討議を行った。調査と討議の結果得られた知見は、HMCブックレットとして近日刊行予定である。

2022年2月のセミナーでは主に三島を、2022年7月のセミナーでは芥川らを具体例として取り上げたが、作家個人の研究にとどまらず、作家の身体が報道でどのように取り上げられたかという問題を広く問うた。2月のセミナーでは作家の全身像の扱いをめぐる、7月のセミナーでは頬杖をつくポーズの類型化をめぐる、それぞれ議論の幅を広げた。

2022年度内に刊行予定のHMCブックレットでは、2回のセミナーでの発表内容を1本の論文にまとめている。作家の肖像に顔のみならず身体が写り込むとき、特にそのポーズが頬杖である場合の意味について、三島と芥川を主に取り上げつつ、他の作家の例も複数取り上げ、横断的に論じた。併せて、近代以前の日本の文学や絵画に登場する頬杖の例や、現代のSNSや歌謡曲で取り上げられる頬杖の例についても論じている。作家の個別研究を超えるだけでなく、時代を横断し、また、文学と美術のジャンルも横断する内容の論文となった。作家研究、肖像研究の新たな論点を開拓できたものとする。

今回の助成研究の成果は、オープンセミナーの開催とブックレットの刊行のみにとどまらず、以後の研究への広がりをもたらした。2022年11月には、国際日本文化研究センター共同研究「ソリッドなく無常／フラジャイルなく無常——古典の変相と未来観」(代表者・荒木浩氏)の研究会で発表を行う予定であり、中世の絵画に描かれた頬杖についての議論を深めてゆく。また、心理学を専門とする上田竜平氏を代表者とする京都大学分野横断プラットフォーム構築事業「人物顔貌の芸術表現とその認知: 人文学・認知科学・制作からのアプローチ」(2022年9月～2023年3月)に参加し、2022年12月に開催されるシンポジウムに登壇することとなった。容姿をめぐる描写の分析にあたり、認知科学の手法を取り入れた共同研究を今後進めてゆく予定である。本研究の成果は、個人研究の発展と、異なる専門分野の研究者との交流を活性化できたことの双方にある。



## 5. 主な発表論文等

### 〔図書〕

- ・HMC ブックレット『排他と頼杖——作家イメージの類型論』2022 年度内刊行予定

### 〔その他〕

- ・HMC 第 55 回オープンセミナー「作家の身体と新聞報道——三島由紀夫の例から考える」  
2022 年 2 月 25 日(金)17:30~19:30、Zoom オンライン開催  
ディスカッサント: 南相旭(仁川大学校)
- ・HMC 第 74 回オープンセミナー「作家イメージの類型論——頼杖、たばこ、筆記具」  
2022 年 7 月 29 日(金)17:30~19:30、Zoom オンライン開催  
ディスカッサント: 李碩(仁川大学校)